

「今日を喜び祝い、喜び踊ろう」(詩編118篇24節)

「今日はどうな日？」

「昨日は良い日だった。でも今日は悪い日だった。明日はどうなるだろうか。不安だなあ」。一秒先でさえ、何が起こるか分からない私たちは日々、より詳しく言えば明日についていつも不安や心配を抱えているような気がします。心穏やかに布団に入ることができない。そんな夜がどれほどあったことでしょうか。明日がどんな日か不安に思う。それには大きな理由があると思うのです。例えば自分にとって都合のよくないことが起これば悪い日。利益を得たり、気持ちがよくなることが起これば良い日といった具合に、目に見えること、耳に聞こえる言葉によって、私たちはその日がどんな日だったかを判断します。つまり結果論でしかありません。しかし何が起こるかは分からない。まるでギャンブルですから、変に期待はできません。そしてその中で、何の根拠もなしに、明日に希望を抱くことはできない。せめて辛いこと、悪いことが起こらないように願う。それはなんと苦しいことでしょうか。聖書はそのように苦しみ悩み、不安を抱えて生きている私たちに、今日という日を喜ぼうではないかと語りかけます。ですがそれは何もなしに、感情論で困難な現実を誤魔化そうというものではありません。

ドイツの経済学者マルクスは「宗教はアヘンである」と説きました。アヘンとは毒物であると同時に鎮痛剤としても用いられていたものです。つまり、宗教は人々の目を現実から背けさせ、宗教的多幸感で誤魔化そうとする。民衆にあきらめと慰めだけを説き、現実の不幸を改革するために立ち上がるのを防いでいる。そういった、鎮痛剤でしかないではないかという批判をしたのです。しかし、私からしてみれば、彼の批判は適当なものではありません。例えば彼の主義に立つ人が今月の箇所を読むとき「やはりキリスト教も非現実的だ」と批判するかもしれませんが、聖書の御言葉は私たちにとって最も現実的であり、世の中を変えるために私たちを何よりも力強く突き動かします。「今日を喜び祝い、喜び踊ろう」という御言葉は、今日がどれほど素晴らしい日なのか、ちゃんと気付こうではないかという招きなのです。私たちは悪いことや目に見える物質には敏感に気づけるのですが、日々与えられている恵み、そして神様については何とも無頓着だからです。

では、今日は一体どんな日なのでしょう。今日は神様によって新しい命が与えられた日です。糧が与えられた日であり、着るもの、寝る場所が与えられた日です。太陽が昇り、風が吹き、月や星が輝く日。困難の中でも愛され、守られ、支えられた日。あなたの祈りが聞かれた日。あなたのすぐそばに、イエス様が共におられた日。こんなに素晴らしい日はありません。そしてこのことが今日も、明日も続きます。たとえ目に見える辛いことがあろうとも、それがあなたにとっての全てではありません。イエス様が共にいてくださる。辛い現実にも打ち勝ってくださる。この約束を信じるならば、私たちは今日を喜び祝い、喜び踊る者とされるのです。そして、喜ぶ者として、私たちは立ち上がり、歩みだすことができます。満たされていることを知らない人は、どこまでも要求してしまいがちですが、恵みに気づく人は、有り余る中から分け合い、平和を実現することができるのです。物質に支配され、目に見えるもので競争をし、不安を煽る世の中において、これ以上強く、革新的な生き方はあるでしょうか。あなたの今日も、素晴らしい日。そのことを分かち合いたいのです。

チャプレン 吉川光太郎





7月のお知らせ

保育理念	受ける愛 与える愛
	—愛されていることを知り・愛する者となるために—

「心地よさを感じる」

回りを見渡しますと、梅の木、くぬぎの木、ハナミズキの葉が生い茂り、日陰をつくってくれるようになりました。そして、春に植えたトマトや胡瓜には実が付き、さつまいの葉は勢いをまして伸び、種まきしたニンジン、オクラ、すずめうり、落花生、トウモロコシは恵の雨を頂き生長中、向日葵、朝顔も元気よく大きくなっています。

子どもたちは、6月より再開した園生活にも徐々に慣れ、泣きながら登園していた姿も懐かしく感じられるような、今日この頃です。

「新しい生活様式」で再開した園生活一ヶ月は、実は子どもたちにとって、とても過ごしやすい環境ではないかと、気付かされているのです。行事に追われない、ゆったりとした時間、グループで活動する小人数の取り組み、一人ひとりの思いに寄り添えるゆとり、皆が一緒にしなくても2回・3回に分けて行えばよいという柔軟性などです。様々な活動では、保育者同士 実によく話し合い、連携を取りながら進めています。このような関係の中で、子どもたちも穏やかな表情を見せているのです。

雨が降らない日は、なるべく戸外にでて園庭や畑、砂場で過ごすように声掛けをしています。戸外では、心地よい風、おひさまの光と影、時折聞こえてくる鳥の声、草むらにいるダンゴムシやミミズ、テントウムシの幼虫や成虫、畑にはカエルやバッタの赤ちゃん、オタマジャクシ・・・子どもたちは自然物との出会いを通してリラックスし、気持ちを立て直し、心地よさを感じているようです。

新入園児にとって園での生活、給食、午睡、朝の会、帰りの会など初めての経験ばかりです。その中でも給食の時間は特に一人ひとり異なります。家庭とは違う素材を生かした味付けや、様々な種類の野菜を目の前にして戸惑う姿があります。しかし、園では、子どもにとって食べやすい環境に配慮し援助しています。落ち着いて気持ちよく食べることが出来るように強要はせず「おいしいね」「この野菜あまくておいしい」「とろとろしてるね」「甘いにおいがするね」「酸っぱいけどさっぱりと美味しい」などと言葉を添えながら舌で味わう共感を通して、食の楽しさを感じられるように関わっています。においを嗅ぐ、なめてみる、一口口に入れてみる、一口食べてみる・・・スモールステップで、少しでも口にできた時は一緒に喜びを分かち合っています。「完食」のみを目指すのではなく、食事の経過の中で、子どもたちの表情を受け止めながら喜びや感動を共有していきたいと思えます。「食は楽しい」と子ども自身が思えるような環境、そのために保育者は優しく、くつろいで、楽しみながら「心地よさを感じる」ことが出来るように援助しています。ご家庭でもスモールステップを試してみてもは如何でしょうか。